
黄色い森

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄色い森

【Nコード】

N6048R

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

秋に書いたものです。シーズンオフですが、少しだけ和んでいたければ。

すしだけ、昔のお話をいたしましょう。

30年も前ですか、ここいらが宅地造成されてない頃のお話です。いたるところ空地だらけ、男の子は秘密基地作りに精を出し、女の子は花冠の出来栄に一喜一憂した頃。

ここは子供たちの広い広い遊び場でございましたとも。

今でこそ色とりどりの家が建ち並んで、庭には芝なんぞが敷かれておりますがね。

玄関前には種のとりにくい観賞用の花が並べられて、繫いでゆく生命のことなど知らぬと言わんばかりです。

ああ、文明を否定するものではないのですよ。

人工的なものを美しいと思う心は、十分に持ち合わせているつもりでございます。

2

ポツンと立っていたヌルデの木はどうしたのでしょうか？

大層大きな木で、かぶれるといけなからと登ったりはしませんでしたが、白い花が美しかった。

時々、夢の中である木の下に立っている幼い私に会うのですが。

二次林などはありませんでした。

そういう意味では、開発ははじまっていたのでしょね。

年寄りたちの話に出てくる木の実拾いやキノコの群生は存じません。

秋の野原の風景は、目蓋に色が滲みつくほどの黄色でした。

丈の高い丈夫な草の　　海の向こうの国から来て、あつという

間に国中に広がった草ですよ。

黄色に泡立つ花がどこまでも続いていました。

良いお月さまが出た晩は、そこで宴などもいたしました。里でしか生活をしたことのない私どもは、そこを「秋の森」と呼び交わしたものです。

入ってしまったえば自分たちは消えたように隠れてしまっ、黄色い森。

あの森は、まだどこかにあるような気がしますねえ。

ご存知ありませんか。

セイタカアワダチソウの森で、もう一度お月見したいものです。

私はもう、ここから動くことはできませんが、子供たちならば訪ねていけるのではないかと思えます。

そこには、仲間がたくさん棲んでいるかも知れません。

私？はい、不自由はございませんよ。

ええ、小学校のプールの下に宿を借りております。

最近では、鳥防止ネットに絡まることなく食事もできるようになりましたし、野良犬は減りましたので争うことも少なくなりました。

やはり海の向こうから来た「ハクビシン」とやりに引っ掻かれることもございませんし。

ただねえ、仲間は減っていくのですよ。

公園の植え込みや道路の路側帯は歩きにくくていけません。

もう一度あの黄色い森を夢見ることは、ただの感傷なんでしょうかねえ。

今ならば、子供時分より冴え冴えとした鼓の音を、月に聞かせることができる気がするのですが。

ぼん、と。

(後書き)

にやっとしていただけましたでしょうか？
少しだけ頬を緩めていただければ、本望です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6048r/>

黄色い森

2011年7月16日06時57分発行